

ドビュッシー・カルテット 感想集



プログラム

- ・ ショスタコーヴィチ 弦楽四重奏のためのエレジー（アダージョ）
- ・ ベートーヴェン 弦楽四重奏曲 第11番
- ・ ショスタコーヴィチ 弦楽四重奏曲 第7番

休憩

- ・ ラヴェル 弦楽四重奏曲へ長調

アンコール

- ・ ハイドン “十字架上のキリストの最後の7つの言葉” よりソナタ第7番
- ・ ムーンライトセレナーデ

どの曲目もすばらしかったです。個人的にはベートーヴェンとラヴェルが本当に聴いていてワクワクしました。アンコールが言葉にならない位よかったです！！

素晴らしい音色にとっても幸せな時間をすごせました。弦をはじいて演奏する奏法が軽快で楽しかったです。特にアンコールは最高でした。弦楽器の音色が好きなので今後もこのようなコンサートが多いといいな。

音楽にくわしくない私には弦楽四重奏を CD で聴くとそれぞれの楽器がどのようにからみ合っているのか聴き分けることができないのですが直に観ることでそれぞれのパートを楽しむことができます。それがうれしい。

曲を知らない私でも楽しく聴けた。音がきれいだった。アンコールの演出はグー。チップあげたかった。

●会場の一言感想ボードへの記入

- ・すごく良かったよ～！
- ・生の迫力、味深ささすがローオンの音楽家たちブラボー
- ・よかった！最高のラヴェル！かっこいー
- ・ I f e e l h a p p y n o w ! T h a n k y o u ♡

この度の例会「ドビュッシー弦楽四重奏団」は、室内楽の素晴らしさを満喫させてくれた演奏でした。2度目の来演でしたが、今回のプログラムがとても良かった。

1曲目のショスタコーヴィチ「エレジ（アダージョ）」の演奏から音色に聴き入ってしまいました。そして、ラヴェル「弦楽四重奏曲」は最高に良かったです。彼らの奏でる暗譜演奏は、自信と意気込みが感じられ、洗練された音色と美しいハーモニーにうっとり。

この日、4人のメンバーとジャズピアニスト、ベーシストの6人でコラボした「室内ジャズ」のCDを買いました。このCD…ラヴェル「弦楽四重奏曲」のピッチカートが印象的な第2楽章から始まり、ドビュッシー・バッハと楽曲が流れる素敵なジャズアレンジされたCDです。貴重なCDを手に入れた嬉しさで毎日、楽しんで聴いています。



期待に違わぬいい演奏で彼らの実力を再認識した例会だった。全曲暗譜というのは今回のツアーが初めてのことだったらいい。それにしても演奏スタイルも様々な形をとっていて、その点でも興味深くまた面白かった。暗譜演奏はチェコのスメタナ四重奏団が有名だったが、チェロ以外が立って演奏するのは創設期のフランスのヴィア・ノヴァ四重奏団（米子労音に来演した時はメンバーも交替し、高齢になっていて全員座っていた）がそうだったし、曲によって第一ヴァイオリンと第二ヴァイオリンが交替するのはアメリカのエマーソン四重奏団がよく知られている。（米子労音ではスペインのカザルス四重奏団で見られた）

プログラムの中では表現にやや個性的なところがあるとはいえ、やはりラヴェルが彼らに一番ぴったり合っていて透明感と軽やかさを持つ音色とアンサンブルの美しさが何とも魅力的だった。ただ個人的にこの日予想外に楽しめたのはショスタコーヴィチだった。

この作曲家の弦楽四重奏曲は様々な要素が混在していて素直には理解できない。背景にある政治的・社会的な影響と彼自身の複雑な個人的感情。これらがごちゃ混ぜにぶち込まれている感じ。時にはグロテスクに、時には皮肉な冗談も聞こえてくる。ところがこのカルテットの演奏で聴くと、どこかすっきりと洗練された爽やかさを感じさせてくれるから不思議だ。ベートーヴェンもちろん集中力に富んだ演奏で楽しめた。米子労音ではもう無理かもしれないが、どこかでまたぜひ聴いてみたいカルテットだった。

今回は運営担当で、ステージ待機の役をしたので、ステージ下手（客席から見て左側の出演者が出入りする側）の舞台袖で聴いていました。

何とんでも立ったままでの演奏に驚きました。ヴァイオリンやヴィオラはリサイタルでは立って演奏するのは当たり前ですが、チェロの立ったままでの演奏は初めて見ました。かつ曲によって演奏体形が変わる不思議さ。その理由を推測してみました。

- 1) 1曲目（およびアンコールの2曲目）ではチェロが立ったままだが、他の曲ではチェロは座っている。これは2, 3, 4曲目の弦楽四重奏曲でのチェロパートが立ったままでは演奏不能であるからだと思います。
- 2) ヴァイオリン、ヴィオラはベートーヴェンの四重奏曲では座っているが、ショスタコーヴィチの四重奏曲では立っている。ベートーヴェンの曲の方が緻密で座っていないと合わせられないから？ スケルツォでは足踏みの音で合わせているように思える場合もありました。
- 3) ラヴェルではチェロが一段高い台の上の椅子に座っている。
ベートーヴェンやショスタコーヴィチの曲より、ラヴェルの曲の方がチェロの役割が大きく、チェロをしっかり聴かせたいから？

ステージ脇での鑑賞の勧め

ステージ脇で聴くと客席で聴くのと違う楽しみ方をすることができます。

- 1) 奏者の顔つき、身体の微妙な動きをまじかに見ることができる。下手からは1stヴァイオリンは背中しか見えませんが、チェロ奏者の顔は真正面にあるので、他の奏者との目くばせまで見ることができます。
- 2) 反響板で反射した音を含まない、生の音だけを聞くことができる。

3) 演奏が終わってステージから出た際にステージ脇で何をしているかを見ることができる。

会話もしていましたが、フランス語なので理解不能でした。

以前にも提案しましたが、会員の中で希望者を募ってステージ脇（下手はやや手狭なので上手が良いでしょう。ただし上記の3)はできなくなりますが。）に椅子を並べて鑑賞してもらおうと新しい体験ができて大変喜んでもらえると思います。

曲の感想

やはりなじみのあるラヴェルが一番楽しめました。他の3曲は今回曲目解説を書くにあたって初めて聞いた曲もあり、まだまだ楽しめる状態にはなっていませんでした。

ギタリスト競演！みたいなラヴェル。隣り同士、対面でユニゾンひいたりしてカッコよかった。暗譜によって動きに制限がなくなって、各フレーズのきっかけがどのパートから出てるかも視覚的によくわかった。

第1部の、「セリオソ」をショスタコーヴィチで挟むプログラムは、完全に「ベートーヴェン失恋の曲」という解釈とみました。「セリオソ」のなかで、ベートーヴェンは、泣いて、反省して、最後に「笑っちゃう話でしょ？チャンチャン」と言っていました。

と、ここまでが当日会場で書いて箱に入れた感想です。ここからはその一ヵ月後の付け加えです。

第2部のラヴェルは、こらえ切れず最前列に移動して聴きました。演奏者も舞台の前の方で演奏していて右から左から音が来るので、首を振りながら聴きました。カトール・ドビュッシーの方々は、本当に楽に音を出しているのが印象的でした。左手の指にほとんど力が入っていない様に見えるのです！ビブラートもほとんどしていないし、ホント不思議でした。SQ（弦楽四重奏団）においてはヴィオラ奏者の力量というか特にテンポ感が重要だと考えているのですが、もちろん今日は大合格です。あと第2ヴァイオリンの方はもう少し音量の出る楽器に換えられたら良いのと思いました。

ところで第2楽章のピチカートが一段落するところの場面転換で、ヴィオラがオクターブの二重音を出すのですが、これってドビュッシーの最後の三つのソナタの「フルート・ヴィオラ・ハーブの為のソナタ」の第1楽章でも使われています。この表現って、雅楽の笙（しょう）の音が「天空の雲の合間から射す光」を表すそうなんですが、それを真似していないのでしょうか？ドビュッシーが当時のパリ万博でガムランの演奏に影響を受けたように、日本の雅楽の演奏があったりしたのでしょうか？

第1部の「セリオソ」を解く鍵はやはり第4楽章の最後の唐突なコーダでしょう。第1楽章で驚愕し、第2楽章で自省し、第3楽章で慟哭し、第4楽章で嗚咽していたのが、最後の最後に、急に喜遊曲のようにハッピーに終わるのは何故か。そして作曲者自身が「公開の場でこの曲を演奏しないでほしい（つまり内輪だけの場で演奏してね）」と注文したということ。

これはその年の初めに、友人から彼の婚約者（当時16歳）の2歳上の姉を紹介された作曲者が、話が合うこともあり舞上がって求婚したはいいが、あっさり断られた事件があり、落ち込んでいるのかと心配している友人達に、ベートーヴェンが答えた曲ではなかったかと推理しました。つまりこうです。「みんな想像したとおり、僕は落込んで絶望して泣いたりしたけど・・・と思ったでしょ？大

丈夫！まったく笑い話だよね！報告終わり！」ということではないでしょうか。
本当にドラマティックな曲目と演奏の例会でした。



♪例会評価♪

会員数：355名（新入会19名）

例会参加者：295名（83.1%）

評価投票数：176名（59.7%）

評価点：99.4%

サークル数：48サークル

例会担当サークル

- ・アンサンブル
- ・クラシック
- ・サロン
- ・高専
- ・2/3
- ・大山
- ・たぬき
- ・椿
- ・ひばり
- ・フォルテシモ
- ・ベーコンサラダ

